

企 画 展

三島の石造物

民間信仰

—サイの神・庚申塔・唯念名号塔・徳本名号塔—

サイの神



中 本村路傍

庚申塔



安久 杉山家墓地(貞享5年)1688

唯念名号塔



加屋町 林光寺(弘化3年)1846

徳本名号塔



芝本町(文政3年)1820

三島市内の路傍や神社、寺院の境内など、私たちの身近な場所には、たくさん石造物が見られます。その種類は石仏、神像、文字碑、あるいは鳥居のような建造物まで実に様々な石造物がありますが、中には身近にあって毎日のように目にしながら、それが何であるか分からないものも案外多いものです。石造物の名称、像の名、書いてある文字、造立年代、またそれを地域の人々がどの様に祀っているか等々、じっくりと見れば見るほどたくさん興味をわいてきます。

このような石造物には古いものが多く、そこに書かれている文字や、それが建立されていた場所等に、地域の歴史や民俗を解く鍵が隠されています。いわば、石造物は地域の歴史民俗の生き証人とはいえるでしょう。

本企画展では、三島に残されている石造物の中から、代表的な「サイの神」「庚申塔」、唯念・徳本両遊行僧の「名号塔」を取り上げ、市内における分布状況、民間信仰としての地域との関わり、及びそれら石造物の写真を展示して、郷土理解に資する内容したいと思います。

■ 開催主旨 ■

サイの神

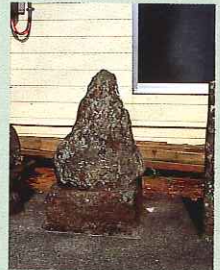


泉町 国分寺境内

旧市内



東本町 言成地藏堂



北沢 愛宕神社前



八反畑 稲荷神社
(寛延3年)1750



長伏 泉福寺



大場神社境内



玉川 道路脇



鶴喰 公民館向



梅名 右内神社



平田 道路脇



山田 集荷所



佐野 山路
(明治40年)1907

北 上
地 区



幸原 耳石神社



一丁田 八幡神社
(貞享3年)1686

錦 田
地 区



市の山 山神社



谷田 御門火の見



塚原 下入口



三ッ谷 山神社
(平成3年)1991

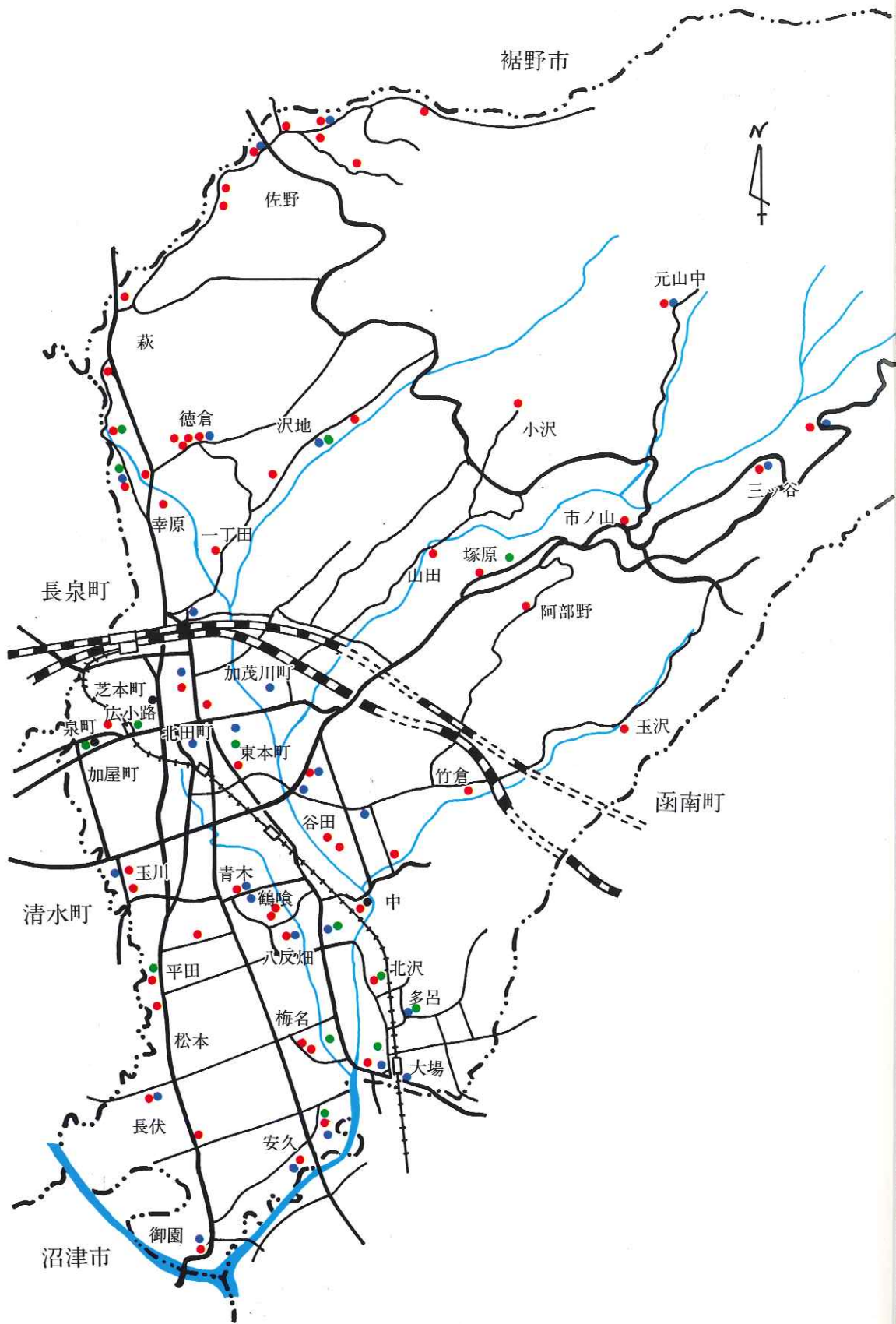


小沢 山道路脇



阿部野 下
(天保12年)1841

石造物(三島市内分布状況)



石造物町内別一覽表

地区	町名	サイの神	庚申塔	唯念碑	徳本碑	合計
旧市内	加屋町			1	1	2
	泉町	4				4
	広小路町			1		1
	北田町		1			1
	芝本町				1	1
	大宮町		2			2
	大社町		1			1
	東本町	4	1			5
	計	8	5	2	2	17
北上	佐野	9	3			12
	徳倉	8	2	1		11
	幸原	2	2	1		5
	菽	2				2
	一丁田	1	1			2
	沢地	3	1	1		5
	文教町		1			1
		計	25	10	3	
錦田	山田	2				2
	小沢	2				2
	元山中	1	1			2
	山中		1	1		2
	笹原	2	1			3
	三ッ谷	1	1			2
	市の山	1				1
	塚原	1		1		2
	阿部野	1				1
	玉沢	2				2
	竹倉	1				1
	谷田	4	3			7
		中計	1	1	1	1
	計	19	8	3	1	31
中郷	梅名	2				2
	中島			1		1
	大場	1	2	1		4
	多呂		1	1		2
	北沢	1		1		2
	八反畑	3	1			4
	鶴喰	2				2
	青木	1	2			3
	新谷	1				1
	玉川	3	1			4
	平田	1		1		2
	松本	3				3
	長伏	2	1			3
御園	2	1			3	
安久	1	2	1		4	
	計	23	11	6		40
全市	合計	75	34	14	3	126



- サイの神 75 体
- 庚申塔 34カ所
- 唯念名号塔 14カ所
- 徳本名号塔 3カ所

庚申塔

北上地区



加茂川町 下神川橋
(延宝8年)1680



北田町 福聚院
(天保11年)1840



沢地 庚申塚
(天和2年)1682

旧市内



多呂 田種寺

中郷地区



山中 駒形神社
(貞享4年)1687

錦田地区



中 手無
(安永5年)1776



大場駅南踏切
(安永5年)1776



青木 周福寺
(元禄11年)1698



八反畑 稻荷神社
(文化2年)



安久 長福寺
(元禄2年)1689

唯念名号塔



広小路 蓮馨寺



徳倉 堰墓地内
(慶応3年)1867



沢地 庚申塚
(明治11年)1878



塚原 宗福寺
(明治12年)1879



山中 芝切地藏堂
(明治9年)1876



平田 県道脇
(慶応元年)1865

徳本名号塔



中 医王寺
(文政2年)1805



加屋町 林光寺
(文化13年)1816



中 手無地藏堂
(慶応4年)1868

サイの神

土地の言葉で「セヤアノカミサン」と呼ばれ、もつとも親しみ深い石造物の一つだろうと思われれます。サイの神は、たいていムラごとに在って、「子供を守る神」とか「村を守る神」などと理解されているのが一般的です。したがって、サイの神のサイには「塞」の字をあてて、ムラに入ってくる災難や疫病、農作物の害獣や害虫を防ぐ役割が与えられているようです。そのような意味もあって、ムラの中のサイの神の位置にはムラの入口や出口の路傍や、ムラの集まりの中心となる広場などに安置される例が多く見られます。サイの神の祭りは正月の十四日の晩か、十五日の朝に行われるドンドン焼きがあり、これが二番正月の中心行事のようになっています。昔から、ドンドン焼きは子供中心の祭りでした。

三島市内には約八十基のサイの神が現存しますが、その形、造立年代等がさまざまです。長野県や山梨県に多く、静岡県では御殿場や裾野に多く見られる双体型は、北上地区に二例（佐野、沢地）あり、甲州方面からの分布の流れをうかがわせます。そのほかの形には丸彫単体型、ついたて光背浮彫型など多種あって、三島におけるサイの神分布の複雑性を現しています。また、造立年代のもつとも古いものは一丁田八幡神社下のサイの神で貞享年間（二六八〇年代）、新しいものは三ッ谷新田のもので平成四年のサイの神があります。このことは、現代もサイの神の民間信仰が生きている証拠といえるでしょう。

庚申塔

三島市内の庚申塔は約三十基が確認できました。その形態の多くは文字碑で、「庚申塔」「庚申」「庚申供養塔」などと碑面中央に縦に大書きしたものが大部分ですが、そのほかには仏像や三猿を刻んだものなどが見られました。「申」を「猿」と結び付け、庚申塔に猿を刻んだ例は全国的に見られ、その多くは「見ざる、言わざる、聞かざる」の所作をした三匹の猿となつています。

また、青面金剛は、伝戸病（結核）を予防するといういわれから、庚申の本尊としても祈願されています。

庚申を祀っている所には、今でも庚申講を行っている地区があります。祀り方は庚申堂を集会所としている地区（徳倉）や、当番を順に回りに持ちして、庚申の掛軸（青面金剛像等）を講の度に祭壇に掲げる地区（新谷）や、一、三年前まで行っていたが、講仲間が老人ばかりになってしまったので今ではすでに止めてしまった地区（大宮町）等、地区によってさまざまです。

庚申講はおよそ二ヶ月に一度ある干支の「かのえさる」の日の晩に開かれます。「この夜、人が寝ている間に、三戸という虫が人の悪行を天帝に告げ口するので、庚申講を開いて夜の明けるまで起きて日待ちを行う」という伝説が一般に流布し、この日を「庚申待ち」と呼んだりもします。

唯念・徳本名号塔

「南無阿弥陀仏」と、独特の文字で大書きした六字名号塔が市内の各所に見られます。唯念名号塔と徳本名号塔です。

唯念上人（寛政二年生、明治十三年没）は肥後（熊本）に生れ、十四才の時に仏門に目覚めて以来全国各地を巡り修行を積んだ後、文政年間の頃駿河に入り、天保年間に明神峠下の奥の沢（小山町）に籠って更に厳しい行を行いました。

奥の沢で修行を積んでいる頃、すでに晩年を迎えていた唯念でしたが、その地を拠点に伊豆、駿河の各地を精力的に行脚し、自ら開いた悟りを語り、教えを広めて回りました。上人の歩いた村々では、「念仏講」が組織されて盛んに講が行われるようになりました。現在でも、お婆さんたちによって、継続されている地域があります。

徳本上人もやはり唯念上人と同じように諸国行脚をして、仏の教えを説き、各地に「南無阿弥陀仏」の徳本名号塔を残しました。

徳本上人の生れは紀州日高郡志賀の庄（和歌山県日高郡）、宝歴八年（一七五八）のことです。二十五才の時往生寺大円について受戒し、二十七才にして出家、四十六才の時にはじめて関東に下り、その後各地を回り修業を積みました。

伊豆や相模、信越方面を説法して回ったのは、もう晩年に近い五十八才の頃でした。三島市内に三基残っている徳本名号塔は、恐らくこの時のものだと思われれます。文政元年（一一八八）、六十一才にして生涯を終わっています。

●参考文献

「三島市誌（増補）」 三島市教育委員会
「伊豆のサイの神」 吉川静雄著
「唯念行者と唯念寺」 小山町教育委員会
「日本石仏事典」 庚申懇話会編

●出品協力者

林光寺 三島市
落合克忠 駿東郡清水町
鈴木辰己 三島市
安久氏子 三島市

企画展 「三島の石造物」

～民間信仰～

平成6年10月23日～7年1月16日（月曜日・年末年始休館）

三島市郷土館 三島市一番町19-3 楽寿園内

TEL(0559)71-8228 FAX(0559)81-3730